

時代の眼

経済の此岸と彼岸

塩野谷 祐 一

経済は社会の中に埋め込まれており、その埋め込まれ方によって経済のあり方が変わってくる。私の経済哲学の構図は、比喩的にいえば、経済という大河を考え、河のこちら側に「経済の根底にあるもの」として社会の制度的条件があり、河のあちら側に「経済の究極にあるもの」として人間の文明的成果があるとみなすものである。

ティグリス・ユーフラテス河流域のメソポタミア、ナイル河流域のエジプト、黄河流域の中国などに見られるように、これらの地域の人々は河川の恩恵によって農業生産力を高め、文明を生み出したが、そのさい灌漑、用水のための治水が常に社会の課題であった。大河をコントロールするために、河の両岸を整備することが必要であるのと同じように、人間にとって恵み深い、氾濫も起こしかねない経済を両岸からコントロールするよう配慮することが必要である。

一般的には、経済というものは、人々のニーズに対して財貨・サービスを提供するために資源配分を行うことにほかならない。古代の原始的生活も、現代の高度な技術文明の生活も、ニーズに対して資源配分を行うという点では変わりはない。そのさいの経済の原則は常に効率である。効率ということは、与えられた資源や技術の制約のもとでつつましく配慮するということであって、適応の行動類型に属する。長い人類の歴史の中で、人類がこれらの制約そのものから脱却し、経済を発展させようとする革新の活動をとるようになったのはここ200年ばかりのことにすぎない。それが産業革命以後の経済成長の現象である。「適応を通ずる効率」の経済に対して、「革新を通ずる成長」の経済が現れたのである。これが可能になったのは、将来のニーズのために現在のニーズを禁欲し、節約された余剰を資本に転化するという社会的制度のおかげである。これが、利潤追求を原動力として使いながら、資本的生産を行う資本主義の仕組みである。

社会保障制度は現代経済を特徴づける最も基本的な仕組みである。それは一定の社会的ニーズの定義に基づいて、その充足のために社会的に資源配分を行うというものであって、その主導観念は「正義」であり、「効率」や「成長」と対立的に位置づけられる。そして正義を実現するための行動

の類型は社会的連帯であって、ここに「連帯を通ずる正義」という第3の規制概念が成立する。経済の此岸はこのような変遷を遂げてきたが、3つの型はもちろん並存しており、それらの間の整合性を問うことが、経済問題としての福祉国家論の課題にほかならない。

しかし、人間は経済によって何を達成しようとするのであろうか。これが経済の彼岸について、経済の究極にあるものを問うことである。過去の人類は、今日に比べてはるかに低い生活水準の下においても、しばしば素晴らしい精神的、物質的文明を築き上げ、人類の遺産の蓄積に貢献してきた。福祉国家はどのような人間的価値の実現に資するのであろうか。豊かで不安のない長寿社会が到来したとして、それはどのような意味で誇るべきものといえるのであろうか。「効率」も「成長」も「正義」も、それらを超える人生の規範と結びついていない限り、空しいものである。

私は、私的欲求の追求に委ねられている市場社会に加えて、社会的正義ないし公正の実現を図る制度機構を持つことによって初めて、個人的自由が望ましい形で確保され、その機能が増幅されると考える。社会連帯の共同体に基礎づけられた自由こそは、個人の自発性と多様性の追求、道徳能力の陶冶、自己実現への努力、創造的能力の発揮、人格の尊厳といったものを促進するための手段であって、そこから人類の遺産として残るに値する質の高い学問、芸術、思想、文化が生まれるのである。これらのものを「卓越」と呼ぶならば、「自由を通ずる卓越」という第4の規範的概念を想定することができる。

私は、卓越した社会こそが豊かさを達成した社会の目指すべき目標であると考え。卓越性の追求は、アリストテレス以来、幸福や正義の追求よりも徳を強調する道徳哲学の立場に属するものである。福祉国家の展開は制度の技術論から生まれるものではない。福祉国家はあくまでも卓越した社会を構築するための此岸の工事である。いいかえれば、福祉国家は社会の倫理体系を制度化したものであって、「自由を通ずる卓越」という倫理的指導原理の自覚なしには構築することはできない。

(しおのや・ゆういち 社会保障研究所長)